

「情報と生活」

下浦 享

はじめに

1999年4月、立教の新しいインターネット環境である立教V-Campusがスタートした。全学生にメールアカウントを配布し、インターネットを大学の基本的なインフラと位置付け教育・研究に生かそうというわけである。インターネットは強力なコミュニケーションの道具であるが、そのオープンさゆえに様々な危険性もはらんでいる。学生としてまた生活者として、そうした環境を安全に活用するためにマナーや利用法を多角的な視点から講義したらどうかと、V-Campus推進協議会(1998年当時)のメンバーであった社会学部産業関係学科の古瀬幸広先生と相談し、この授業を企画することとなった。

高度情報通信社会を「生活者」の視点からみることをテーマに、授業の担当者としては、さらにテクニカルライターの高橋慈子氏と弁護士紀藤正樹氏をお願いすることにした。高橋氏は、数々のマニュアルやガイドブックを出版している会社を経営しておられ、

V-Campus利用ガイドブックも執筆していただいている方である。紀藤氏は、ご存知の方も多いでしょうが、消費者トラブルやインターネット犯罪に関する専門家である。

このほか、授業展開や成績評価の方法等コーディネータの仕事も、古瀬先生と私の2人で相談して行った。

授業内容

講義のスケジュールは、イントロダクション-社会生活の道具としての情報機器、ネットワークを高橋氏に、高度情報通信社会の成立-インターネット文化の成立、発展、将来-を古瀬先生、高度情報通信社会の技術基盤-コンピュータおよびネットワークのしくみと現状-を私、高度情報通信社会と法-生活者として知っておきたいこと-を紀藤氏が担当し、さらにまとめとして担当者全員によるパネルディスカッションを行うという構成をとった。これらの授業は、それぞれの担当者が、まず、プレゼンテーション装置等を用いて主題についての講義、関連する内容についてディスカッションを

行う。履修者はその内容に対する質問を次週までに電子メールまたは紙で提出し、それを次の講義で生かすという形式で行った。電子メールは担当者全員に配送されるようになっている。また、講義で用いたプレゼンテーションや資料は、V-Campus イン트라ネットサーバ上にある <http://vcampus.rikkyo.ne.jp/univ/shimoura/teaching/sogoB/>で閲覧することができる。授業担当者と学生とのコミュニケーションツールとしてもインターネット、特にV-Campusのシステムを利用するという試みでもあった。

初回は、オリエンテーションとして、満員の7102教室で、私、古瀬先生、高橋氏がそれぞれ簡単な自己紹介を行い、上述の授業方法について説明した。

高橋氏のイントロダクションでは、履修者の多くが入学したての1年生でコンピュータやネットワークの初心者であることを配慮し、主に、電子メールを用いたコミュニケーションについて講義された。電子メールの得失を理解し、自分と相手との関係を意識したうえで、わかりやすく情報伝達するための心得について、プレゼンテーションを用いた講義、担当者たちの経験談のインタビュー、実習を交えて教授された。学生にとっては、異なる人の異なる経験談が印象が強かったようであり、質問メールでもそれに触れるものが多かった。余談になるが、受講者の中に聴覚障害者がいたが、古瀬先生はキーボード入力が速く、高橋氏や私の

話を口述筆記で前のスクリーンに表示させるといったこともあった。

古瀬先生は、多彩な経験談をもとに、インターネット文化・社会のあゆみ、変遷を講義された。たくみな話術で、学生の興味を引きつける内容であり、学生にとっては特に、阪神淡路大震災直後のインターネットの体験談の印象が強かったようである。

私の担当分では、コンピュータやインターネットがどれくらい簡単な約束事で動いているかを講義したつもりであるが、残念ながら、私の「簡単」はどれも学生たちには難しいものに映ったようである。細かなしくみを理解する必要はないが、「簡単」なもののつまかさねがインターネット技術をささえており、それゆえ、強力であり危険性もあること、それを理解していれば、トラブルや危険に対処することは意外に簡単なのであるがそれを教えることの難しさを感じた。2000年問題については、それなりに関心が高く何人かから質問を受けた。もっとも、幸か不幸か、これを執筆している今となってはあまり大した問題にはなっていません。

紀藤弁護士は、ご自分がどのようにインターネットを活用されているかを紹介され、さらに、「サイバースペースの市民のための七つのルールと三つの前提」のルール

- サイバースペースの危険を知る
- 自分の身は自分で守る
- 表現することの責任を自覚する
- 自分がされたら嫌なことを、他人に

もしない

- 世界基準で考える
- 他人のことを表現するときには気をつける
- 戦う姿勢を忘れない

を解説された。また、授業期間後すぐに成立した、「不正アクセス禁止法」および「組織犯罪対策法（盗聴法）」に対する意見を述べられた。後者については学生の関心も高く、いくつかの質問が寄せられた。

パネルディスカッションでは、担当者それぞれがいかにインターネットを活用しているか、何に心がけ危険をどう回避しているかについてあらためて議論した。さらに、これはまったくのハプニングであったが、V-Campus 不正利用事件（V-Campus ホームページを参照のこと）についても議論した。実際に身近におこった事件であっただけに学生の関心は非常に高く、授業の企画時には意図していなかった教育効果があったと思う。

学生の反応

電子メールが使えない学生のため、最終回は質問会とし、授業時間の前半に質問を記入させ、後半にそのうちいくつかに回答した。電子メールによる質問は600通以上、紙による質問は最終回を含めて200通以上あった。

質問のうち半分以上は、講義で担当者たちが何度も触れておりよく聞いていればわかるはずのものであった。大半の学生の質問に対する回答として、

前述の七つのルールと、高橋氏からの以下のメッセージをあげたい。

「コミュニケーションは場数を踏んで上達します」

電子メールの書き方やオンラインコミュニケーションでのメリットとともに、デメリットや気をつける点を講義で話したせいも、失敗しないためにどうしたらいいかと、心配する質問もいくつかありました。絶対、失敗しない方法はありません。むしろ、失敗を身につけてください。「人の振り見てわが振り直せ」といいますが、いいお手本を見つけてマネし、悪いお手本を見たら自分で気をつけることです。また、失敗したときに素直に誤る勇氣をもっている人が、より良いコミュニケーションを育むように思います。

「自分の考えをもって、実践してみる」

インターネットの世界は、まだまだ新しい分野ですから、まだ確立していないルールも多いですし、危険性もないわけではありません。「だから、法などで取り締まって欲しい、規制して欲しい」と考えるのではなく、参加する人が自立的にルールを作ってゆくことが重要だと考えています。お互いに異なる立場を尊重し、実りのあるコミュニティを形成するためには、どうしたらいいのかを、常に自分なりに考えてください。考えたら、実践してみて、検証する。

さらに考える。この繰り返しが、比較的容易なものインターネットの世界の良さです。繰り返す中で、自分たちの中で完結するのではなく、開いたループを作って欲しいと願っています。

おわりに

私個人にとっては、文科系の学生、それも200人を超える学生を対象にした授業は初めての経験であった。その内容も専門とは異なる分野であり、体系だった教育を受けたものでもないことも不安であった。しかし、インターネットは、今やコンピュータサイエンスあるいは情報科学といういわゆる理科系の研究・教育分野から大きくはみ出してきており、理科系・文科系を問わず研究・教育においてなくてはならないものになっている。こうした内容を、一人の担当で講義することは非常に困難であり、複数の担当者によって行う全カリ総合B科目の性格にふさわしいものの一つではないかと思える。学生の反応や授業内容の組み立てにとまどいながらも、分野の異なる担当者の

様々なモチベーションを伺うことは、私個人にとっても視野を広げるきっかけとなった。また、「情報」をキーワードにして様々な分野を見直したとき、「情報学」ともいうべき新たな研究分野の可能性を感じる。実際、最近では、ネットワーク型情報メディアの活用と情報を活かす新技術というテーマで2000年情報学シンポジウムが開催されたり、分野横断型の研究組織がつくられたりしている。情報学が学問的に体系づけられていくかどうかについて、即断はできないが、既存の学部の専門性をベースにし、それらを横断することが新たな分野をおこすきっかけになるとすれば、全カリの一つの発展形となりうるのではないだろうか。

最後に、「情報と生活」を担当していただいた先生方には、単に授業時間だけでなく、電子メールのやりとりなど多くの時間を割いていただき、深く感謝したいと思います。

(しもうら すすむ 本学理学部助教授
1999年度総合B群コーディネーター)